特集にあたって

大村拓生

本特集は、ひょうご歴史研究室赤松氏と山城研究班が八年間の活動を終えるにあたって、現研究班のメンバー全員に執筆を要請し、それぞれの状況に応じて提出されたものである。

このうち大村拓生「前期赤松氏と禅宗寺院」・山上雅弘「前期赤松氏の城郭と拠点形成」は、令和四年（二〇二二）一〇月一六日に西播磨文化会館で行われた当班の総括的な意味をもつひょうご歴史文化フォーラム「前期赤松氏の実像―城郭と寺院から―」での同名報告がもとになっている（当日の報告順）。大村論文は前期赤松氏の歴史的展開をたどるなかで、禅宗寺院を一門の分裂と家中の統合の両側面での結節点にあったと位置づけ、山上論文は考古学的には前期赤松氏が整備した赤松地区は既存の流通ネットワークに変更を迫るものではなかったが、城山城・白旗城という恒常的な構造をもった山城を築城・維持した軍事的側面を色濃く保持したと評価する。

両論文とも当日の報告から増補されているが、シンポジウムで文献史の司会をつとめた古野貢「前期赤松氏の実像―ひょうご歴史文化フォーラムを振り返って―」が両報告をサーベイした上で、備中での守護細川家・国衙領代官に被官安富氏を送り込んだ細川京兆家・浅口郡などを知行する京兆家庶流の野州家の関係と、流通拠点のあり方から比較をおこなっている。また当班外からコメンテーターをお願いした新谷和之「近江六角氏の拠点形成―前期赤松氏との比較を通じて―」は、六角氏が前期赤松氏に相当する段階では在京活動が中心で恒常的な山城も存在しなかったが、応仁・文明の乱後に在国して、一六世紀には当主のみならず被官も在城する分国支配の拠点たる壮大な観音寺城を構築したと対比する。

当班と連携して実施された赤松居館跡範囲確認調査の担当者で、シンポジウムにも登壇した島田拓「赤松居館跡　発掘五年間の成果」は、検出された遺構面について、放射性炭素年代測定と京都系土師器皿の多寡から、下層を赤松円心期に、大規模に整地された上層を赤松則祐・義則期に位置づける。それに対して考古学の立場で司会をつとめた中井敦史「上郡町域の中世土師器」は、居館跡出土土師器全体を一四世紀後半代におさまるものとみなした上で、町域全般としては山陽側からの影響をうけた一方で、京都系土師器皿は赤松氏に直接関わる場に限定されていた可能性を指摘する。また当班が調査対象とした城山城について、永惠裕和「城館研究への高精度ＤＥＭの活用―南北朝期の城館を捉えるために―」は、最新技術を用いて縄張図で表現できない現地形の立体図を提示し、南北朝期の城館は遺構だけでなく戦争のあり方も検討すべきとする。さらに田村正孝「南北朝・室町期における播磨国一宮と守護赤松氏」は、大村論文で捨象されている一宮伊和社の祭祀・造営基盤がもともと宍粟郡を中心としたものであったことを確認した上で、赤松氏の保護のあり方と新たに建立された「惣神殿」を取り上げる。

また歴史遺産活用として、当班メンバーも加わって平成二九年（二〇一七）に史跡指定された利神城跡の現状について、佐用町の浅野博之教育長から「利神城跡のその後―保全と活用―」として原稿をお寄せいただいた。あわせて当班メンバーでシンポジウム登壇者でもあった義則敏彦「城山城について」、後期赤松氏の代表的な城郭について、大谷輝彦「坂本城と置塩城―姫路市を代表する赤松氏の遺跡―」が、それぞれの現状について報告している。さらに近世に山城がどのように扱われたのかについて、竹内信「『安志藩大庄屋井上家文書』―古城申伝書上覚―」が、その一端を示す史料を紹介している。また当班のメンバーではないが、赤松氏研究にとって重要な意味をもつ当館の前田徹学芸員の最新著『中世後期播磨の国人と赤松氏』について、大村が紹介と若干のコメントを記した。

それぞれの見解の細かな相違については統一していないが、多面的な角度から赤松氏の実像を浮かび上がらせることができ、八年間の総括に相応しいものになったのではないか。